天孫のお降りになった処は九州の南の端でしたから、神武天皇に至って都を国の中央 にお遷しになることになり、その途々で抵抗する野蛮な土賊どもを平らげられた。

たかちほ みや せいじ **高千穂の宮の政治**

さて、**瓊瓊杵 尊** 以後三代の間は、都を常に日向の国内(今の宮崎県)に置いて、政治をされていたので、都に近い地方の者は、その 庇 で強盗や乱暴者に悩まされる事もなく、安心して 漁 業 や 農 業に近ります。ことも出来て、飢えも凍えも無く年月を送っていました。

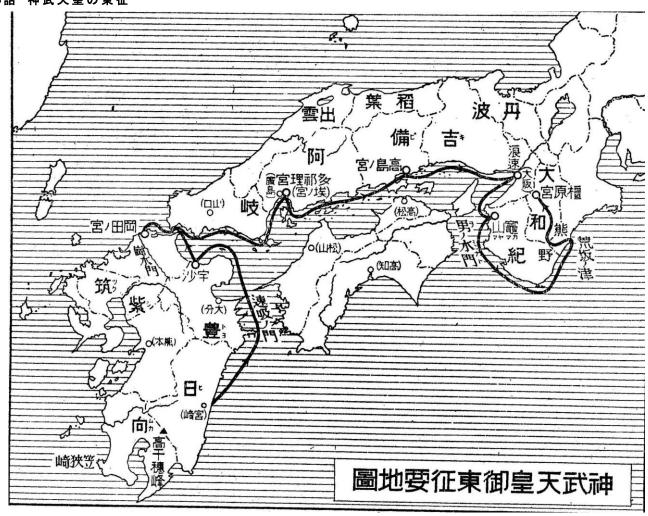
けれども、都からずっと遠い地方になると、到るところに野蛮な土賊が割拠していて、力を争い、たたが、たばなず互いに戦争をして、弱い者を虐げます。 それが為に田畑は踏み荒されます。 収穫した物はりゃくだっ 略 奪されます。 何ひとつ落ち着いて生活をすることも出来ないので、善良で弱い者は他国へ逃げていくか、悪い者の奴隷にでもなるかしないと生きて行けませんでした。 とりわけ、女や子供は、いつ、悪者に騙されて、どんな目に遭うか知れない有様でした。

日向の高千穂の宮に住んで政治をされていた神倭磐余彦 尊 は、後に神武天皇と国民が崇め 奉 った程の偉い方でしたから、こういう世の有様をご覧になり、あゝ、哀れなことだと思し召した。 じっとお考えになった後に、ある日、兄の五瀬 命 にこう話されました。

「私たちは日の神の仰せを奉じてこの国の平定に従事しているのですが、今までに治め得たのは、この大きな島国の未だほんの一部分に過ぎません。 この九州という島の東にあるのが本島なのですが、その大部分はまるっきり野蛮人どもの領分になっているようです。 とてもこんな辺鄙に都を設けていては、それらの野蛮人を征服することは出来ません。 したがって、そいつらに苦しめられている善良な者どもを救ってやることは出来ません。 ですから、この際速やかに都を本島の中央に遷すべきと思います。 無論、途中でいろいろの困難に出遭いましょうが、皆が心をひとつにして、十分の軍備を整え、いっしょうけんめい となってやれば成功しない筈はありません」

五瀬 命 は「なるほど」と賛成されましたが、本島のどの辺に都を定める積りか、どこか心当たり たづ の 処 があるか、とお尋ねになった。

すると、天皇は、「それに就いては、嘗て鹽土の 翁と申す者に聞いたことがありますが、本島の中央に大和という 処 があるそうです。 四方がことごとく山ではありますが、船やいかだを浮かべるに良い川もあって、四方への交通の便利もよく、気候も悪くなく、暮らし良い処だそうです。 そこへは、昔、同族の饒速日が天の磐船に乗って参ったとか聞いています。 しかし、今もあの男が帰って来ないのを見ますと、野蛮な土賊に殺されたのかも知れません。 もしもそうならば、その無法を罰する為もあり、先づ大和を目当に参る積りです。 本島の中央である以上、全国に号令を下して政治をするには最も都合の良い処であろうと存じます 」と仰せられました。



日向ご出発

これで、九州を出陣なさる事が確定して、すぐさまにそのご準備となりました。 東の方への進軍になったので、これを後には「神武天皇の東征」と呼んで、わが国の成り立ち始めの最も重大な事件として歴史に記されることになりました。 そのころ、天皇は御歳が45才で、お子も幾人かありました。また、高千穂の宮に仕えていたご家来も大勢いましたが、その大多数は瓊瓊杵尊が高天原からお降りのときに随って来た神々の子孫であり、既に何代も経て来た間に、その土地の者とも結婚したりして、その数は非常に多くなっていました。 そして、全ての者が昔を忘れずに、忠実に力を合わせて政治を輔けてお仕え申していたので、君臣の間はいつも親子のように親しみが深く、今も高天原の昔と同じように全く君臣一家となっていました。

それで、このご出陣は、その実、高天原からお降りの天孫ご一族全体の、九州から本島への引越しでしたので、支度が大変でなかなか手間が取れました。 やっとのことで準備が整って日向の国を出発し、その付近の港から一同が船に乗り込んで、九州の東海岸に沿って北へ北へとお進みになりました。

ご順路

船が豊後水道を瀬戸内海に入ろうとして速吸の瀬戸に近づいた時、妙な格好をした男が大きな亀のような小船に乗って、だんだん近づいて来たので、天皇は何者かと不思議に思われ、呼び寄せてお調べになった。 その男は「私はこの国の主で、珍彦と申します」と言ったので、「国の主ならばこの辺りの

ことは詳しいであろう。 海路の案内をせよ 」と言われました。

珍彦は 謹 んでお受けして、「 私は天孫様が当方へご出 陣 の事をかねて 承 わっておりましたので、 実は今日はそのお迎えに参りました。 どうかこれからはご家来としてお使い下さい 」と言いました。

天皇は喜ばれて、船から棹を珍彦の小船に降ろしてそれを伝わって上がって来させ、改めて、お呼びになった。 「棹を使って私の前に来たのだから、棹根津彦という名を与えるぞ」と言われて、もう長い間お供をしている者かのように、心安く親切に話されたので、棹根津彦も有難がり、すっかり天皇のご高徳に感心して、天皇のお為ならばどんな命がけの忠義もしようという気になりました。

こうして**珍彦**が案内に立ってからは、もう船路の心配は無くなりました。 おまけに順風ともなって来たので、船は豊前大分の宇佐に着いた。 そこでは、土地の豪族の**宇佐津彦**と**宇佐津姫**とがお出迎えして、大きな御殿まで造っておもてなした。

こうして天皇が乗り込まれた幾艘もの軍船は堂々と舳先を列ねて、瀬戸内海を 東 へと、折からの じゅんぷう しゅんぷう しゅんぷう 順風にまるで青 畳の上をすべるように進んだ。 水先案内の役には、棹根津彦が今もなお忠 実に立ち働いていました。 さて海上に何の障りも無くて、岡山の高島の宮を出て20日余りで大阪湾に面す摂津 ない の浪速にお着きになった。 折しも春の半ばのことで、野にたなびいた 霞 の奥に大和の山 脈がわずかに見えていました。

「ここまで来ればもうすぐだぞ!」

目指す敵地が鼻の先になったと思うと、めいめいが勇み立って、一時も早く乗り込んで行って、**天皇**ため ちゅうぎ ばたら の為にめざましい忠義の 働 きをしたいと思いました。

〈 ゑ カ 孔舎衙の坂の戦い

やがて上陸して、天皇は龍田という処を指してお出かけになりましたが、行く手の道がいかにも狭く、険しくて、とても二人並んでは通れないところでした。 守るに具合が良さそうだが、攻め込んで行くには勝手が悪いので、よんどころなく引き返して、更に東の方へ廻り、生駒山を越えて大和に入ろうとされました。

せると、その頃大和の土賊で、最も獰猛な頭目でした長髄彦が、早くもこの事を聞き知って、孔舎衙

の坂というところに大軍を以って待ち構えていて、天皇の軍勢を打ち破ろうとした。 けれどもそれは天皇の予知されていた事でしたから、「何ほどのことがあろう! ただ一気に踏み破れ!」と、天皇は威勢の良い号令を出されました。 「それっ!」と一斉に矢を放って攻めかけたが、強いと有名な長髄彦の事とて、頑固に抵抗します。 矢軍が数時間にわたりました。

天皇の兵は勇敢だが、何と言っても九州以来の長い間の進軍で体が疲れていた上に、土地の案内にも暗かったので、十分に地の利を知った土賊が、険しい地形を頼んで、思いがけない処から矢を射掛けるなどして悩ますので、天皇の軍勢は次第に多くの損害を蒙るようになって来ました。

のみならず、軍の中堅とも仰いでいた**五瀬 命 が**その肘に流れ矢で 重 傷 を負われたために、**天皇** の軍はますます 勢 いが挫け始めました。

いつせ のみこと ふしょう 五瀬 命 の負傷

天皇は「なるほど」と 額 かれ、先づ手づから兄上の傷口にとりあえずの手当てをされた後、全軍に号令を下して、急いで手際よく兵をまとめて、お引返しになりました。 長髄彦も、この 戦 には勝ちには勝ったが、相手の手剛いことを知ったと見えて、さすがに追い討ちをしようとはしませんでした。

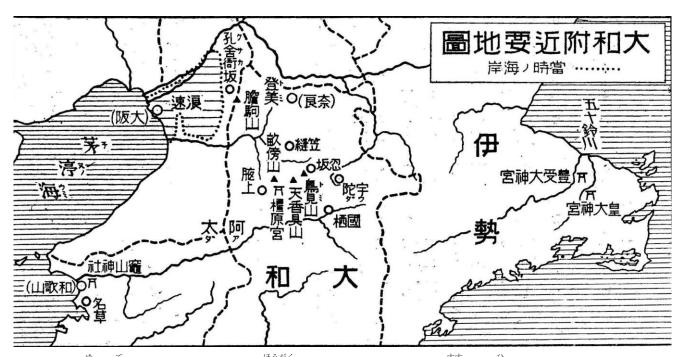
さて、日を背に負って大和へ攻め込むには、遠く紀州 和歌山の海岸を廻って、熊野から入って行く他に道はありません。 天皇の軍勢は再び船に乗って海上を南にまわる事になったが、その途中で五瀬 命はこの傷が原因で、とうとう亡くなりました。 命は実に、建国の為に身を犠牲となされた 最も初めのまからせい こうぞく 最も 忠誠 な皇族でありました。

こうして図らずも兄上を亡くされた事は、天皇にとってどんなに大きなお嘆きであり、打撃だったでしょう。 しかしこのご出陣の大目的をお考えになると、ただ悲しんでばかりではおられません。 一日も早く大和の土賊どもを討ち平らげて、首尾よく遷都の実を挙げなければ、兄上のご無念をも慰めることが出来ない訳ですから。 五瀬 命 のお亡骸は紀伊の竃山という処に厚く 葬って、ご自分から気を励まして更に全軍をお進めになりました。

くまの けん 熊野の嶮

変風の荒い紀州 灘にかかってからは、進路を東に取って、やがて 漸 くにして熊野の地に上 陸になった。 そこにも野蛮な土賊が威を振るっていたので、反抗して来る者は討って平らげ、ご仁徳を慕って来る者は許して臣下とされて後、いよいよ大和を指して進まれた。 ところが、この熊野地方は高い険し

いくえ かき こんにち い山が幾重にも重なっており、その 間 々 の谷は深く、大きな森林は昼もなお暗く生い茂って、今日で よういに も容易に入っては行けない処でしたから、その当時の困難は非常なものだったでしょう。



ついには行く手の道がなくなって、方角すらも分らなくなり、進むも退くも出来なくなった時に、不思議や、どこからともなく一羽の大きな鳥が現れて、その鳴き声も勇ましく、大きな翼でふわりふわりと飛んで行きます。 その有様がまるで道案内をでもするようでしたので、天皇はそのあとをつけて進まれると、次第に道が開けて、さしも険岨な山また山をも無事に越えて、大和の吉野川の川尻に出られました。

ゃ_{まと} 大和の土賊ら

う だえうかしおとうかし宇陀の兄猾と弟猾

ところが、兄の**兄猾**は自分を一番偉い者と考えており、降参などはけしからない、と大いに怒って、 お使いを、矢を射て追い返して、急いで兵を集めて**天皇**の軍勢を迎え撃とうとしました。 しかし、今ま

ではいつも彼の命令に服していた兵士達も、今は天皇のご威徳に恐れて少しも集まって来ません。 そこで、よんどころなく、うわべは降参の使いを出して、天皇をお迎えするためにと急に大きな家を建て始めましたが、その実、彼はその家の中に押機といって、その上に上れば 忽 ち床 板が跳ね返って押しつぶされるような恐ろしい仕掛けを作り、そこへ天皇をお迎え申そうと 企 んだのです。

これを見て心配したのは**弟** 猾でした。 彼は兄の兄猾と違って、天皇のご高徳を蔭ながら崇めていた者でしたから、兄が素直にお使え申そうとしないのを前から苦にして、それとなく諫めて見たりしていました。 しかし、この卑怯な計略を知ると、今は一刻も猶予している時では無いと、早速天皇の陣中に参って、その事を残らずお知らせした。 天皇は弟 猾をお褒めになって、彼をば陣中に留め置いて、本もおみ たまる のの おおくめ のの おおくめ から はんぎゃく 道臣の命と大久米の命という二人の将軍に仰せつけ、兄猾が反逆の様子を確かめさせられた。 この二人は天皇の軍中でも最も重い地位にあった将でした。

さて**道臣の命と大久米の命**の二将は**兄猾**のところに行って、「今度お前が造った御殿の中へは、先づお前が入って、用意のほどを良く見せい」と言われた。 そして兄猾が困ってぐずぐずしていると、一人がたな つか は 刀 の柄に手をかけ、一人は弓に矢を番えて追い入れたので、兄猾はとうとう自分の造った押機に自分がかかって押しつぶされて死んでしまいました。

もとより自業自得とはいえ、こうして兄が無残な最期を遂げたのを見ると、**弟** 猾 もさすがにあわれに思ったが、これというのも全く、長い間暴威を振るって人々を苦しめていた天罰であると思うと、彼はいよいよ天つ神の御子のご威徳に懐いて、以後はずっと天皇の忠 実な臣下となりました。

斯うして宇陀の土賊は平らいだが、大和全体の様子を見ると、まだまだ方々に悪者どもが割拠しています。 忍坂というところには土蜘蛛という土賊がいるし、磐余邑には兄磯城、弟磯城という兄弟の頭目が威を振るっています。 ずっと平野を隔てた向こうの登美の地には、孔舎衙の坂の戦い以来、恨みの深ながすねひこいます。 彼こそ一日も早く討ち平らげたいのですが、それにしても、途中の悪者どもから片付けなければ進んでいくことが出来ません。

つちぐ も や そ た け る 土 蜘 蛛 の 八 十 梟 帥

それで**天皇**は、先づ手近な忍坂の土蜘蛛から討とうとされたが、彼らは大きな横穴の中に住んでいるような野蛮な土賊で、力こそ強いが、知恵は至って足らない者どもであります。 まじめに相手と戦って、わが軍隊を疲れさせたり損じたりするよりは、むしろ計略を以って討ち取ることにしようと思われて、お使いをやって、「天つ神の御子がご馳走を下さるから一同で参るように」と丁寧に言わせてお招きになりました。

がれらっちくも、できたける。 彼等は土蜘蛛の**八十梟帥**といって、80人もの主だった者が一緒になって立て籠っていましたが、これを聞くと大いに喜びました。 「さては、神の御子とやらも、おれたちの武勇には敵わないことが分ったので、ご馳走をして降参するのに違いない。 行ってやれ、行ってやれ」 と、一人残らず 頭 を揃えてやって来ました。

計略通りになったのですから、こちらもまた大喜びで、さも鄭重にもてなすかのように、その 80 人の一人ひとりに、一人づゝの給仕人を付けて酒を飲ませ、ご馳走を食べさせるなどした。 これがすなわち計略で、その 80 人の給仕人は、実はみんな選り抜きの勇士だったのです。 やがて相当にお酒のまわった頃に、天皇が立たれてお歌を語いになるのを合図に、80 人の給仕人がどっと一度に関の声をあげたかと思うと、その一人ひとりの梟帥に斬ってかゝった。 全くの不意の事ですから、梟帥はあっと驚く間もなく、いちどきにみな討たれてしまいました。

兄磯城、弟磯城

既に兄猾を 誅 し、今また八十梟帥を討ち取って、天皇の軍勢はいよいよ盛んになりましたが、目指すながすねひこ む 長髄彦に向かうまでには、未だ兄磯城、弟磯城の兄弟がいます。 しかし、大敵に向かおうという大事の前ですから、なるべくならば兵を用いずに帰順させたいものだと天皇は思われて、兄猾兄弟の時と同じように、先づ使いをやって降参をお勧めになった。 と、結果も、兄猾兄弟の時と同じように、弟の弟磯城は直に参上してお仕えしたが、兄の兄磯城は幾度説いて論してみても頑固で、どうしてもご命令に従おうとしません。 ついに、よんどころなく軍勢をお進めになって、やがてこれをも難なく滅ぼされました。

もっと どうもう ながすねひこ **最も獰猛な長髄彦**

これで、いよいよ**長髄彦**をお撃ちになることになったのですが、彼は大和の土賊の中でも最も獰猛な きうもく 頭目であっただけに、領地も広く、軍勢も多く、その根拠としている登美の地には、要害堅固な、立派な でいたく かま なら ほうい ふきん ふ 邸宅を構えて、並ぶものない暴威をその付近に振っていました。 いかにこちらが連戦 連 勝の 勢 いに 乗 じているとはいえ、必死の覚悟を以って当たらなければなるまいと、ご知慮の深い天皇は思われて、勇 ましい軍歌までお作りになって部下の勇気を一層励まされました。

実際、長髄彦を討ち取らなければ、大和は本当には平定しないのですが、また、ひとつは、孔舎衙のあくしゅう いっせ のみこと むねん は たてまっ た きょうちゅう き りの 復 讐 をして、五瀬 命 のご無念を晴らし 奉 ろうというお考えが絶えず天皇の 胸 中 から消えなかったので、今度こそは必ず彼を斃さずにはおかないと、一層堅い決心をもなされたのでありました。

さて神武天皇の軍勢は、堂々と登美の地を指して押し寄せて行って、日を背に負って敵陣に攻め込みました。 けれども、敵はもともと地の利を得ている上に、既に十分の備えをもしていたので、ここに 現れ、かしこに隠れて、いかにもよく防ぎます。 容易には勝つことが出来ません。 時は冬の最中のことで、殊にその日はよく晴れていたのですが、丁度戦いが最も烈しくなった時に、どうしたのか、俄かに空が真っ暗になって、真黒な雲が地にまで舞い下がると見る間に、どっと大風が吹き出だし、大粒の 雹 が降ってきて、物凄い光景となりました。

これには敵も味方も驚いて、思わず真っ暗な空を見上げていると、その時、どこからとも無く一羽の大きな金色の鳶が飛んで来て、小高い丘に立って、戦いの指図をしておいでであった天皇のお手にしている弓の上彈にとまった。と、その体から稲妻のような鋭い光を発して、さっと長髄彦の軍勢を照らしたので、賊の軍卒は一瞬に目が眩んでよろよろと倒れんばかりになった。しかも、わが軍のためには却っ

て敵の所在がよく分って、攻撃をするのに都合がよくなったので、いづれも勇んで、どっと急に攻め立てた。 敵は散々に破れて引き 退 きました。

ながすねひこ じん すると、間もなく**長髄彦**の陣から使いが来て、**天皇**に申し上げることがあるといいます。 何かとお あめ いわふね 嘗て、天つ神の御子が天の磐船に乗って天から降っ 尋ねになると、「 謹 んで**長髄彦**が申し上げます。 おんな にぎはやひ のみこと たてまつ ておいでになって、今、私の処におられます。 御名を饒速日 命 と申し 奉 る。 私の妹を妃とせ にぎはや ひ のみこと られて、既にお子までお生まれになっている。 私はその饒速日 命 を君として仕えております。 かるに 承 るところに依れば、あなたも天つ神の御子だと言っておいでだそうだが、天つ神の御子にそ う幾種もあるはずは無かろうと思う。 恐らくはこの国を奪いとろうとするために、天つ神の御子と 偽っ ているのではありませんか?」と申します。

天皇は饒速日 命 が大和に来ていることは、かねてご承知の事なのですが、今、長髄彦の軍 中 に奉じられているのがはたして本当の饒速日 命 であるかどうか、先づそれを確かめなければならないと思し召して、その使いの者に仰せられた。 「天つ神の御子も大勢ある。 長髄彦が仕えている者が本当に天つ神の御子ならば、その証拠があろう、それを見せよ」と。

使いが帰ってその事を**長髄彦**に言いますと、彼は大得意で、**饒速日命**がかねてから秘蔵する天の羽々や かちゆき 大と歩靱という二つの宝物を出して、再び使いを**天皇**の陣に送った。 **天皇**はそれをご覧になって、「なるほど、これがあるからには天つ神の御子に相違ないが、その証拠はこちらにもある」と、やはりお持ちになっていた天の羽々矢と歩靱を取ってお示しになりました。

にぎはや ひ のみこと きじゅん **饒速日 命 の帰順**

ところが、**饒速日** 命 は天つ神の血筋を引いておられる方だけに、 順 逆 の道理を十分に 弁 えておられたので、すでに事がこう明らかになって見れば、この上抵抗するのはよろしくないと、しきりに**長髄彦**を諭して、**天皇**の軍門に降らせようとなされた。 しかし、**長髄彦**がどうしても 従 おうとしなかったので、今はもうこれまでと、ついに固く決心されて、ある日、ご自分で**長髄彦**を殺した上で、部下の軍勢をで、今はもうこれました。

天皇は、日向においでの時からどうしたか知らと気にかけておられた饒速日 命 が、こうして無事でおられた上に、あの獰猛な長髄彦を討ち取り、大きな手柄をも立てられたので、心からご満足に思われた。 厚くお褒めになり、命の部下の者どもをも、日向からお連れになったご臣下と同じように、少しの分け隔 てもなく信用してお用いになったので、饒速日 命 は勿論、その部下も皆、天皇の御威徳に服して、いよちゅうぎ はげ よののべ ながく皇室の為に働いたのはこの饒速日 命 の子孫です。

じんむてんのう とうせい (第5話 神武天皇の東征 終わり。 次は前頁に戻り、第6話 橿原 **算都** へ)